

## Special Essay

### 大学の教養課程

自然科学教室 化学  
東元 祐一郎

1991年に「大学設置基準」が大綱化するまでは、国公立私立を問わず、ほぼすべての四年制大学に教養課程が存在した。私もその典型的な教養課程で大学の1, 2年次を過ごした1人であるが、ちょうど専門課程に進級する頃に、後輩のカリキュラムが大幅に変わったのを覚えている。それまで学んでいた教養部の教室が改築され、教養部所属の先生方が専門の講座や別の大学へ異動になるなど、今振り返ると、当時の大学が、今時の「くさび型教育課程」へと改組される大移行期だったということになる。当時、大学の教養課程の人気のある科目は学部学科の垣根を越えて数百人規模の大講堂で行われていた。大講堂で行われる講義では、出席をとるわけでもないのに、その講師の話聞きにくる学生達でいつも満員だった。それまで高校で受験勉強ばかりをやってきた自分達にとって、大学の教養課程で学ぶ、人文化系の科目はひと味もふた味も違う新鮮なものが多かった。一方で、所属していたサークルの別の学部の先輩に憧れ、その先輩が履修する教養科目を狙って選択し、毎朝、大講堂のどこかに座っている先輩を捜すのが楽しみだった科目もある。また、同じ学科の同級生の女の子に誘われ、半ば無理矢理履修した美術史では、試験の時に、他に頼る先輩も、友人もおらず、その子と2人で大学の図書館に通って試験勉強をしたのも良い思い出である。教養課程で履修し、学んだことが今の自分自身にとって、どれくらい実となり、役に立っているのかはわからないが、たとえ単位取得の為だったとはいえ、あの時ほど図書館に通い、生涯のうちで幾度と目にすることはないのであろう!? 幅広い分野の専門書を調べ読み漁ったというのは紛れもない事実である。

今年、久留米大の医学部は1年次のカリキュラムの改組があり、英語と理科基礎科目の充実が図られることになった。医学部の低学年時における理科基礎科目の履修の大切さを訴えてきた当事者の1人とすれば、現在の状況はこの上ない状況である。一方で、結果として、大学でしか学べない人文化系の教養科目が大幅に減り、大学に入学した直後から非常にタイトな時間割を強いられることになった学生を不憫に思うのも確かである。医学部の学生は本当に大変だ。

